東京人工群島

360000キロの瞳

楠原笑美

ガッ!Q文庫

東京人工群島

36000キロの瞳

橋原笑美

ガッ!Q文庫

東京人工群島

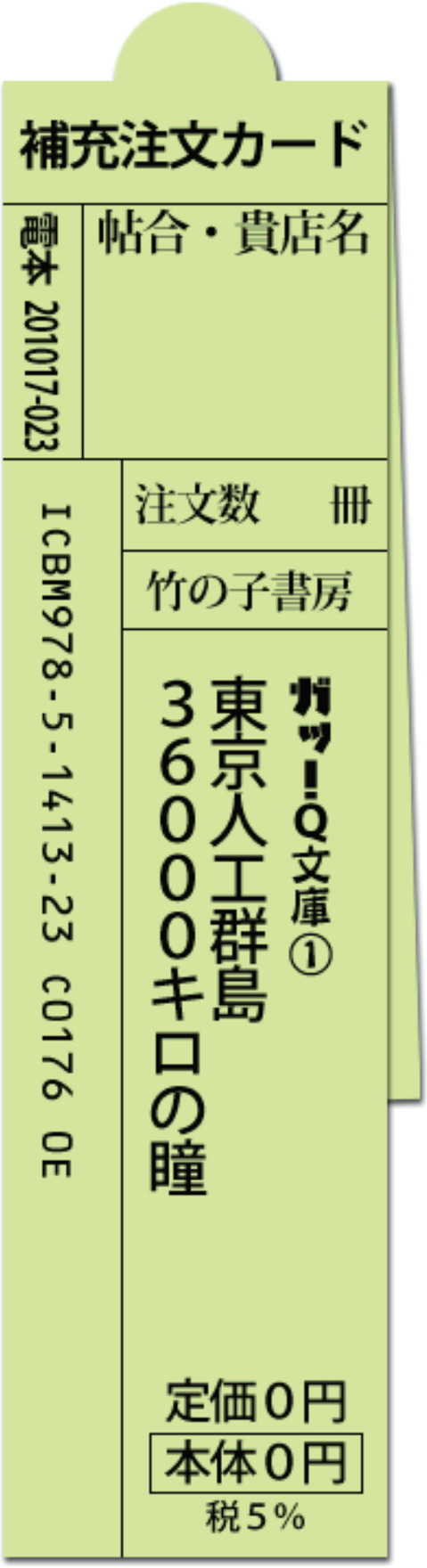
36000キロの瞳

楠原笑美 著

ガッ!Q文庫

※本書に登場する人物名・団体名・描かれている内容は架空のものです。作中において現代では若干耳慣れない言葉・表記・廚二病的表現が登場する場合がありますが、これらは原文の執筆時期が古いためです。決して差別・侮蔑・自爆を意図する考えに基づくものではありません。

カバー・挿画　よしはるk



あの頃の未来にて——

二〇一〇年から見て、今を遡ること十九年ほど昔。

その後、爆発的な普及を始めることになるインターネットは、当時はまだ黎明期にあった。それどころか「インターネット」という言葉すらも生まれていなかった。

原始的なパソコン通信で繋がれた人々のうちのごく一部は、大学構内に網を張り巡らせ始めたばかりの構内ネットワーク（ＬＡＮ）が、いずれ広域ネットワーク（ＷＡＮ）に成長していくことを予見し、また、あともう少

しで手が届く、実現間近の未来技術が普及する世界を待ち焦がれた。

東京湾に現れた広大な埋め立て地。そこに集う、未来を見上げて暮らす人々。

この物語は、バブルの熱が醒めやらぬ時代に、そんな〈間近に迫る現実——近すぎる未来〉を夢見て紡(つむ)がれた。

共同幻想の舞台の名は、東京人工群島。

一九九〇年代初頭に生きた著者達が垣間見た、二十七年後の世界へようこそ。

最初に手をつけた宿題

お父さん

3年2組　松下桃郷

僕のお父さんはとても忙しくて、毎晩遅く僕が寝てしまってから家に帰ってくる。日曜日や土曜日にも休みがとれないので、どこかにいっしょに遊びにいったことをあまりない。

風邪をひいて仕事を休んでいるお父さんは、学校から帰ってきた僕に、ロケット作りはとてもむずかしいんだぞ、と、仕事の話をしてくれる。僕が今よりもっと小さいときから、お父さんの話はいつもロケットのことばかりだった。むずかしくてよくわからなかったけど、お父さんが家にいるのがなんだかとてもうれしくて、お父さんが毎日風邪をひいていてくれないかなあ、と思った。

お父さんも僕も花火が大好きだ。でも忙しいので、あまりいっしょに花火を見にいけなくてつまらない。今年こそはいっしょに花火を見にいけたら

おじさんと花火

見にいけたら……その先が思いつかなくて、僕、松下桃郷（とうご）はペンを放り出した。

夏休みの宿題はぜんぜんはかどらない。新学期が始まる前に残りの宿題を片付けてしまわないと、夏休みの最後の楽しみである花火大会には連れていってもらえないのに。

お母さんは早く算数のドリルと作文をやれってうるさいけど、僕にとってはドリルなんかより花火大会のほうがずっと大事だった。

なんていったって、花火大会はすてきだ。

通い慣れた登校路の道ばたには、わたあめ、金魚すくい、ビー玉の入ったラムネ、ＵＦＯ風船にお面、ぴかぴか光るヘアバンドに、焼きそば、たいやき、たこ焼きの香ばしい匂い、そしてリンゴ飴やチョコバナナの屋台が並ぶ。

いつも見慣れているはずの街が、特別な場所になってしまう。

だから花火大会は大好きだ。それにもうひとつ理由がある。

月島のおじいちゃんがまだ生きていた頃に行ったお祭で見た花火だ。

近所の八百屋さんや魚屋さんのおじさんたちが、捻(ねじ)りはちまきにハッピを着て大きな御輿(みこし)をかつぎ、大騒ぎをしながら通りを抜けていった。定員はとっくにいっぱいのように見えるのに、つかまりきれないほどたくさんの人たちが、御輿にめがけて群がっていった。

僕はおじいちゃんちの物干しに上がって、おばあちゃんに買ってもらったイカ焼きを食べながら、ハッピを着た大勢の人たちと一緒になってもまれるお父さんとおじいちゃんを見ていた。

大輪の花火の下で、お父さんは御輿に辿りつこうとも

みくちゃにされながら奮戦していた。その晩でいちばん大きな花火が光ったとき、お父さんと僕の目が合った。

信じられないほどたくさんの人がいたのに、僕は確かにお父さんを見つけることができた。あんなにもみくちゃにされていたのに、お父さんは確かに僕を見つけてくれた。

そしてお父さんは、僕を見てにっこりと笑ったんだ。

お祭が終わってから、僕がお父さんを見つけた話をすると、お父さんは嬉しそうにこう言った。

「桃郷、お父さんはな、いつだっておまえのことをちゃんと見てるんだぞ。おまえがどんなに人混みにいたって、花火が照らしてくれるからちゃんとおまえを見つけることができるんだ」

何だかとても嬉しかった。それから僕は花火がとっても好きになった。花火の音を聞くとお父さんが僕を見つけてくれるんじゃないかって気分になれた。

でも、それからしばらくしてお父さんの仕事が急に忙しくなった。だから、お父さんと一緒に行ったお祭も一緒に見た花火も、それが最後になってしまった。

僕のお父さんは人工衛星を作る仕事をしている。とても忙しいので、滅多に家には帰ってこない。友達の家では土曜も日曜もお父さんが家にいるのに、僕のお父さんは忙しすぎて土曜も日曜も休めない。だから、ディズニーランドや花やしきに連れていってもらったこともない。

最近では出張でバイコヌールという外国の街に行ったきりなので、お父さんはいつも電話のモニターの中にいる。

電話の画面に映っているお父さんは、あの花火の晩と同じように決まってこう言う。

「桃郷、お父さんはいつもおまえのことを見てるんだぞ。本当だぞ。おまえがどこにいたって、ちゃんと見つけられるんだ」

でも、お父さんはちっとも家に帰ってこない。きっと今は人工衛星に夢中になっていて、本当はもう僕の事なんか見ていないんじゃないかと思う。

でも、今度の花火大会は違う。ぎりぎりだけど、お父さんは花火大会の日の夕方には家に帰ってくると言っていた。昨日もちゃんと約束した。だから、それまでに宿

題をあげてしまわなくちゃならない。
宿題を全部やって、それからそれから……お父さんと
花火を見るんだ。

兄ちゃんと花火

花火大会の前の日、お父さんから電話があった。僕はぐっすり寝ていたので、お父さんから電話があったことなんか、ちっとも知らなかった。

お父さんからの電話を受けたのは、市道(いちみち)兄ちゃんだった。

翌朝ラジオ体操から帰ってきた僕に、兄ちゃんは事もなげに言った。

「父さん、帰ってこれねぇってよ」

僕は耳を疑った。

「なんで!?」

「なんでも何もねぇよ。途中でカウントダウンのやり直

しがあって、打ち上げが少しだけ延びたんだってさ」
兄ちゃんはバイコヌールでがんばっているお父さんがどんな仕事をしているのか、たぶん僕よりもちゃんと知っている。僕にわかるのは、人工衛星を打ち上げるのは何だかとても難しい仕事らしい……ということだけで、何がどう難しいのかはさっぱりわからない。ただ、兄ちゃんが説明してくれた事の中で、僕にもはっきりわかることがあった。
お父さんは花火大会の晩には間に合わない……。
「じゃ、じゃあ花火大会は？」

「てやんでぇ、無理言うなよ。帰ってこれるのは、急いでも今月ぎりぎり……夏休みが終わる前に会えればラッキーってところなんだから……」

市道兄ちゃんは、らしくない歯切れの悪さでそう言った。

この初夏まで洋上大学の付属高校で生徒会長をやっていた兄ちゃんは、竹を割ったようなすっぱりした性格で女の子にモテモテだった。右か左か、黒か白か。何でもはっきりさせないと気が済まない、せっかちできっぱりした性格は、死んだ月島のおじいちゃんによく似ている。

「そんな……」

僕は泣きたい気分になった。
兄ちゃんは僕の気分を察してくれたのか、ざんぎり頭をかきながら言った。
「よう、桃郷。夏休みの宿題、終わってんのか？」
「あと、作文だけ……」
今日、がんばって作文を書き上げて、なんとしてもお父さんと一緒に花火大会に行きたかった。なのに……。
「しょうがねえな。じゃ、母さんには黙っておいてやるから、それはできたことにしておけ。そしたら、今夜は兄ちゃんがついてってやるからさ……おいらと一緒に見

に行こうな。花火をよ」
僕はきっと本当に泣きそうな顔をしていたに違いない。
兄ちゃんは蚊にくわれた脇腹をぽりぽりとかきながら、
僕の頭をくしゃくしゃとかきまわしてそう言った。

姉ちゃんと花火

運河にはいっぱいの屋形舟が繰り出され、水面にちょうちんの残像が揺れている。
花火は豊島（とよしま）の海浜公園から打ち上げられているみたいだった。
群島区の北側ではビルが邪魔なので、まだあまり高いビルが建っておらず、しかも灯がなくて暗い東京湾を背に花火を見るために、花火大会の場所は豊島になったのだ、と兄ちゃんが教えてくれた。
「桃郷、迷子になんなよ」
あたりはすごい人出だった。学校までの道のりは、信

じられないくらいたくさんの人でいっぱいで、車道と歩道の見分けもつかないくらいだった。辛うじて、屋台の屋根が並んでいるあたりが、車道と歩道の分かれ目あたりなのだろう。威勢のいいテキヤのおいちゃんたちが声高に叫ぶ客引きの声が、沿道のあちこちから聞こえる。

花火の音と光が、遥か頭上から僕の頭の上に降り注いだ。縁島（へりしま）から見る花火は音が光にほんの少し遅れて伝わってくる。

「おお、すげぇな。どうだ、桃郷。見えるか？」

兄ちゃんは僕を肩車しようとしてくれたけど、何だか

恥ずかしい気がしたので僕は乗らなかった。恥ずかしかっただけじゃない。今し方同じクラスの杉本とすれ違ったんだ。杉本は僕がお父さんと遊んでもらえないことを、いつもネチネチとつっこんでくる。僕の事を『本当の子供じゃなくて荒川運河にかかってる若洲大橋の袂で拾われてきたんだ。だから相手にしてもらえないんだ』なんて言うんだ。

杉本もあいつんちのお父さんと一緒に花火を見に来ているみたいだった。だからよけいに悔しくて、お父さんとではなく兄ちゃんと一緒に来ていることを、あいつに

気付かれたくなかった。
何だか無性に一人になりたくなってしまった。
「桃郷、豊島の会場まで行ってみるか？　……おい、桃郷？
どこだ、桃郷!?」

僕は兄ちゃんの目を盗んで、一人で川沿いを歩いた。
小学校の近くにある花見ができる丘公園の並木道は、座り込んで宴会をしながら花火を見る人たちでいっぱいだった。あちこちに店を開いている屋台には、家族と一緒に花火見物にやってきている僕と同じくらいの年頃の

小学生が群がっている。どこを見てもみんな楽しそうで、僕は何だかひどく寂しかった。

とぼとぼと歩いていくうちに、僕は小学校の前までできてしまった。学校の門の回りには、ブロック塀の代わりに並木と低木の生け垣が作られていて、入り込もうと思えばいくらでも入れる。学校の回りが花火見物の人でざわついているのに、校庭は妙に静かだった。

身を隠すものが何一つない校庭の真ん中に向かって、静けさに惹かれるように僕はふらふらと歩きだしていた。

スターマインと枝垂れ柳を組み合わせたきらきらする

豪華な花火が、南の空を黒いキャンバスに変えた。花火が上がるたびに火薬のはじける轟音にあわせて、辺りに人々のざわめきが広がった。それは子供の歓声だったり、大人の歓声だったり。

なんだよ。

たかが花火じゃないか。

火薬が爆発するだけのものが、何がおもしろいんだよ。

上がって爆発するだけの花火より、僕のお父さんの口ケットのほうがずっと……。

でも、そのお父さんは花火大会にはこない。

何だか無性に悔しかった。涙がこみ上げてくるのも悔しかった。

「どうしたの、坊や」

僕は両目をTシャツの肩で拭って顔をあげた。

振り返ると、腰までの金髪を無造作に縛ったどこかのおねえちゃんがいた。

「なんでもない」

僕が泣いていたことは、誰にも知られたくなかった。何を悔しがっていたのか、なぜこんなに涙がでるほど悔しいのか、自分でもよくわからなかった。

「ははーん、おうちの人とはぐれちゃったんだね？　お父さんと一緒に来たの？」
「違うもん。お父さんは……お父さんなんかきてないもん。お父さんは、仕事が忙しいから、僕なんか構ってる暇ないんだもん」
僕の声はほんの少しふるえていた。それは寒いからでも、見ず知らずのおねえちゃんを前にして怖かったからでもない。泣きそうな気持ちをおねえちゃんに悟られないように、必死にこらえていたからだ。
闇に慣れた僕の目の前に、おねえちゃんの青い瞳が見

えた。瞳の奥に背後で上がった花火が映りこむ。
おねえちゃんは膝を折って中腰になると、そっと僕の頬に触れた。
細くて、すべすべしていて、そして温かかった。
「そんなこと、絶対にないよ。キミのお父さんはちゃんとキミを見てるよ。キミのことを絶対に忘れたりしない。いつもキミのことを考えてるよ」
「違うもん……」
「……泣いてるの？」
花火のためにナイターも消されて、校庭はひどく暗

かった。でも、おねえちゃんにはまるで僕の姿が見えるみたいだった。

しゅるしゅるという音がして、その日最後の……たぶんこの夏で最後の花火があがった。いくつものスターマインや、リングや、花や……夜空をねずみ花火のように飛び回る光のかけらが目にまぶしかった。

「お父さん……花火を見るのが大好きなんだ。僕ももちろん、大好きさ。でも、お父さんは……今年も花火を見られなかった。僕は、お父さんと一緒に見たかったんだ」

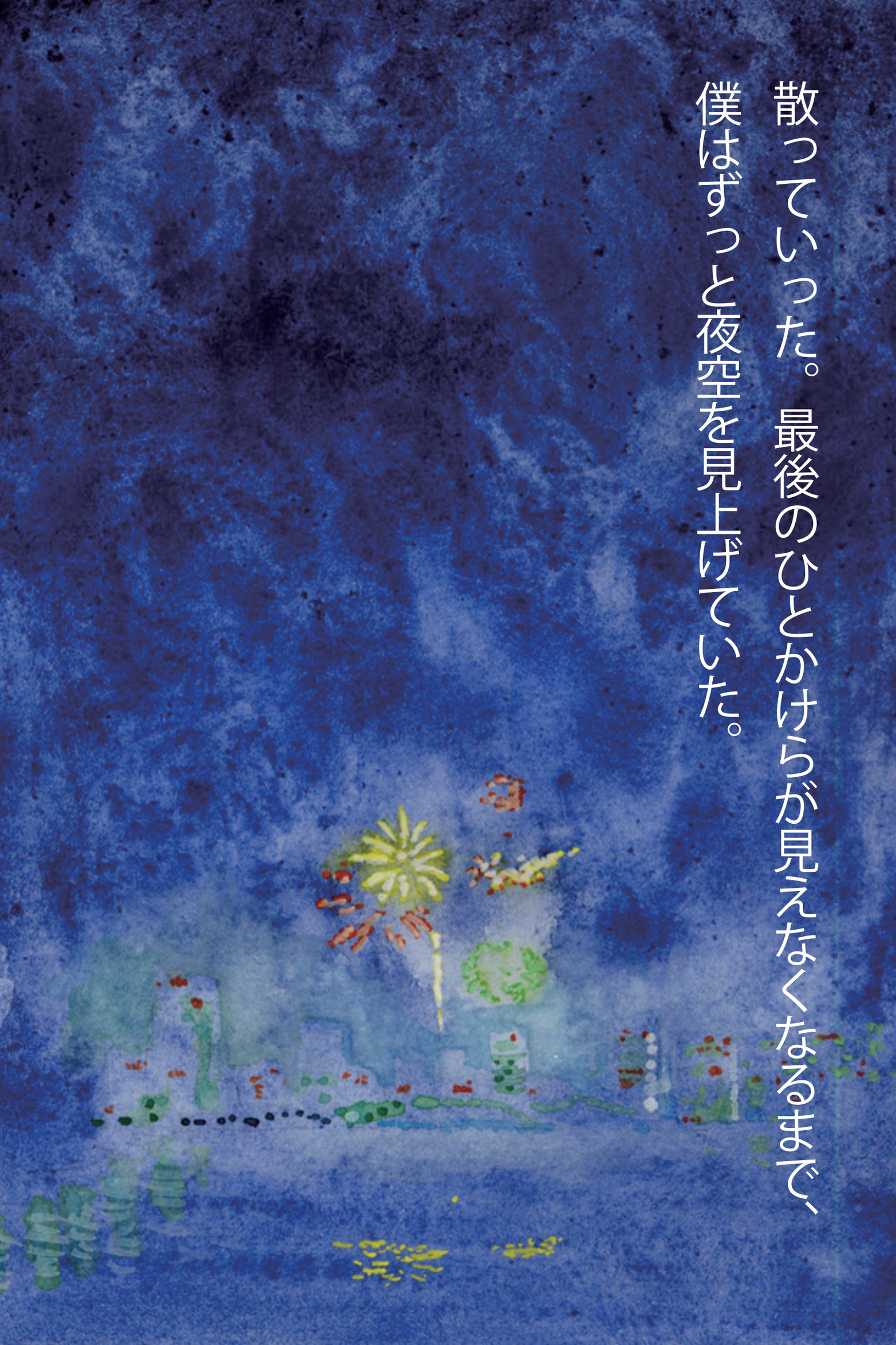
お父さんが忙しいのは知っている。難しくて大事な仕

事をしているのも知っている。男の子はいつまでもわがままを言っていちゃいけないってこともわかってる。だけど……だけど、たまには僕を構ってくれたっていいじゃないか。

「お父さんもきっとどこかで見てるよ。キミと一緒にさ」

おねえちゃんはそういって慰めてくれた。でもこの花火を見るには、いくらなんでもバイコヌールは遠すぎる。

金色に光る特大の枝垂れ柳があたりを昼間のように明るく照らした。その光は次第に小さくなり、幾千幾万の流れ星が天の川から流れだしたみたいに、さらさらと



散っていった。最後のひとかけらが見えなくなるまで、
僕はずっと夜空を見上げていた。

僕と花火

「だから迷子になんなって言ったろ？」
兄ちゃんはずいぶんと僕を捜しまわったらしい。僕があのおねえちゃんに連れられて家に帰ってきたとき、とても心配そうな、でもすごくほっとした顔でそう言った。
こうしてこの夏最後の花火大会は終わった。

幾日も残っていない夏休みを過ごしながら、僕は最後に残った宿題をもてあましていたが、一向にペンは進まなかった。
そして夏休み最後の日に、バイコヌールのお父さんか

らエアメールが届いた。
「桃郷、父さんから小包がきてるぞ」
兄ちゃんに呼ばれて、僕は勉強部屋から居間にやってきた。兄ちゃんはカルピスをついだコップを僕に手渡しながら、国際便の小さな小包を解いて中身を取りだした。
入っていたのは、お父さんの悪筆で走り書きのメモのような文章が綴ってある手紙と、三十分くらいしか録画されていない国際規格のビデオ・メモリ・カードが一枚だけだった。
兄ちゃんはＶＭＣのデッキのスイッチを入れながら手

紙を読んでくれた。
「あー……ええと？『市道、今年から大学生なんだからしっかりやれよ。桃郷、夏休みの宿題はちゃんとやったか？　お母さんを困らせちゃいかんぞ。お父さんは、いつでもおまえたちのことをちゃんと見ているんだからな』だってさ。そんなこと、いつも電話で言ってる癖に……」
居間の大きなモニタTVに、VMCの画面が映った。
最初は砂嵐のようなノイズばかりが入っていて、画面には何も映っていない。僅かに誰かの話声が聞こえてくる。

……ざざ。
『静止軌道上に……衛星を投入する……』
『コングラッチュレーション、この衛星の国際標識は二〇一九-〇二五Aだ』

何のことだかさっぱりわからなかった。つまらなくなって、残っていたカルピスを飲み干して勉強部屋に戻ろうとしたとき、兄ちゃんが独り言のように呟いた。
「この人工衛星、父さんが打ち上げたんだぜぇ。いくら

花火が高く上がっても三万六千キロも高くは上がらない。いくら花火が綺麗でもはじけて消えればそれでおしまいだ。でも、父さんの人工衛星は違う」

常々、兄ちゃんはお父さんの仕事は難しくて大変で、だけどものすごく大事で立派で自慢できることなんだと僕に教えてくれた。でも、僕にはいつも半信半疑で、どこがどうすごいのかよくわからなかった。

『よし、実験開始』

聞き慣れたお父さんの声が画面から流れてきたとき、僕の目は自然とモニタＴＶに奪われてしまった。

画面に地球が映っていた。

夜の側を映しているせいか、青くて、丸くて、白い雲がいっぱいかかっているリングのように見える。暗い夜の所には幾筋かの光の点が瞬いている。まるで夜空の星が地球に張り付いているみたいだった。

一瞬、画面が脈打ったように思えた。

画面に映っていた地球はだんだん大きくなっていった。明るい昼間のところではなく、暗い夜のところをどんど

んズームアップしていく。
雲の合間を縫って、細長く横たわる白い日本列島が見える。ライトアップされたビルや街灯や日本中を取り囲む道路の灯や……日本列島はたくさんの灯に照らされてまばゆいばかりに見えた。
東京が見える。他の街よりずっと明るい。街の形が浮き彫りになるくらいだった。
だが、ズームアップは止まらない。ぐんぐんと僕の街が近くなっていく。何かささやくような音声が聞こえていたけど、それは僕の知らない言葉だった。

「群島区だ！」
僕のよく知っている街が見えた。
何かが群島区の上でちかちか光っている。
信号？　青や赤や……。
兄ちゃんが、その正体に気付いた。
「……花火だ」
花火はずっと下から見上げるものだと思っていた。
でも、お父さんも花火を見ていたんだ。この三万六千キロの高さにある人工衛星から。
僕には街の灯と花火の区別が、あまりよくわからな

かった。街には消えない花火のようにたくさんの光が満ち満ちていたからだ。

どんどん。

ズームは続いていた。

運河沿いの並木道に、たくさんの人があふれているのが見える。灯が途切れ、ぽっかりと誰もいない広場のようなものが見える。

それは学校の校庭だった。

ズームは校庭の中央の、ある一点に向かって進んでいった。

ずんずん。

「……すごい！」

そこに――夜空を見上げる僕の姿があった。

最後に終わった宿題

お父さん

3年2組　松下裕郷

僕のお父さんはとても忙しくて、毎晩遅く僕が寝てしまってから家に帰ってくる。日曜日や土曜日にも休みがとれないので、どこかにいっしょに遊びにいったこともあまりない。

　風邪をひいて仕事を休んでいるお父さんは、学校から帰ってきた僕に、ロケット作りはとてもむずかしいんだぞ、と、仕事の話をしてくれる。僕が今よりもっと小さいときから、お父さんの話はいつもロケットのことばかりだった。むずかしくてよくわからなかったけど、お父さんが家にいるのがなんだかとてもうれしくて、お父さんが毎日風邪をひいていてくれないかなあ、と思った。

　お父さんも僕も花火が大好きだ。でも忙しいので、あまりいっしょに花火を見にいけなくてつまらない。でも、お父さんがいつも僕のことを見ていてくれることを知っているので、僕はちっともさみしくない。

お父さんは僕のじまんです。

目次

5 あの頃の未来にて
7 最初に手を付けた宿題
9 お父さんと花火
18 兄ちゃんと花火
24 姉ちゃんと花火
37 僕と花火
48 最後に終わった宿題

本書の続きを、読みたいですか？

竹の子書房文庫は、読者の皆様のご意見・ご感想を糧に、ニョキニョキと成長します。もっと読みたい、続きを読みたい、もうやらんでいい、などなど、ご意見ご感想などありましたら、

竹の子書房【36000キロの瞳】
http://tknk.wwu.jp/?p=421

こちらに感想を一言添えてReTweetしてくださいませ。

RTがたくさん付くようでしたら、大慌てで続きを書きます。

竹の子書房文庫創刊に寄せて

竹野正法　竹野美恵

竹の子書房の前身である筍書房は、昭和二十年、終戦直後の東京に創立した。空襲により焼け野原となった国土を前に、我々は何故負けたのかを自問自答した創業者・竹野正法は、そこに彼我の文化の差を痛感したという。当時の日本は学童の就学にも事欠く有様であったが、良い図書を広く頒布せしめることで日本の教育水準を一層高めると同時に、知を愉しむ、娯楽としての読書の価値を広めるべく、古今東西のあらゆる娯楽を書籍化することを決心した。当初、一刻も早い国土の再興を願った竹野正法は、自らの姓から一字取り「竹書房」と名付けることを考えた。しかし、創立当時、空襲で焼け残った土に半ば埋もれたあばらや住まいであった竹野は己の分を弁え、敢えて「未だ土の中」として筍書房と名付けた。竹野正法は、焦土の中から拾い集めてきた焼け板に、燃え落ちた家屋の墨を溶いて「筍書房」と墨書した。焦土の苦しみを忘れまいぞと誓うこの看板は、平成頃まで長く筍書房の誇りと誓いを現すものとして本社正面玄関に掲げられてきた。その後、竹野正法の願いは須く実現された。昭和二十七年、サンフランシスコ平和条約の発効により自由を取り戻し、続く朝鮮戦争特需で奇跡の復興を成し遂げた日本にあって、筍書房は広く教育と娯楽を提供するべく粉骨砕身し、筍書房はウィットとペーソスを身につけた教養人の育成に努めた。

平成の初め、日本は空前のバブル景気に沸いた。筍書房は経営の拡大を目指して不動産経営など多角経営に乗り出していたが、バブル崩壊と同時に経営が悪化。会社更生法適用が視野に入る、会社存続の危機に見舞われていた。創業者・竹野正法は、失意の中、会社存続を願って世を去った。この筍書房の空前の危機を救ったのが、後に社長職を継ぐ竹野美恵である。既に萌芽はあったものの、男社会であった出版界ではその内容に眉を顰める者も多く日陰に甘んじてきた「やおい」に着目した竹野美恵は、女性読者の獲得を狙ってこの分野を表舞台に引き上げた。竹野美恵の狙いは的中し、日陰で腐り果てていた日本全国の腐女子、貴腐人の心を掴むことに成功した。筍書房社内ではこれを「美恵流」と称して讃え、後の「ＢＬ」の語源ともなった、とされている。筍書房は美恵流の成功により息を吹き返し、娯楽出版社として甦った。竹野美恵はさらに改革を推し進めた。旧来の筍書房という社名では如何にも厳ついイメージが強く、美恵流に馴染んだ若い読者に近寄りがたいイメージを与えてしまう。そこで、ＣＩ戦略に則り、社章と社名の刷新が進められた。社のシンボルマークである竹の子印はこのときに社章として選ばれた。竹の子印はその後、数代に亘って修正が加えられ、平成二十二年に現在の形となった。社名については「筍」の文字を読めないゆとり世代の若年層にも読める文字をという配慮から、音を同じくしつつ「竹の子」とした。昭和二十年の創立から六十五年をして、ここに現在の「竹の子書房」の名称が定着した。

竹の子書房はその後躍進を続け、電子書籍事業に進出、特化を果たした。しかし、創立時の竹野翁の気高い志を忘れることなく、竹野美恵の柔軟さを蔑ろにすることなく、なお一層の進展と社会への貢献を続けていくべく、ここに誓いを新たにしたい。

竹の子書房

※初出 1992 年 Network-GL/ 東京人工群島

東京人工群島

36000 キロの瞳

2010 年 10 月 24 日　初版発行
2012 年 1 月 2 日　改訂第六版発行

著者　楠原笑美
http://bit.ly/acKJ9q

監修　加藤 一 @azukiglg
表紙挿画　よしはる k

発行人　加藤 一
発行所　竹の子書房
http://www.takenokoshobo.com/
製版所　GLG 補完機構

©Kusumi Kusuhara/Takenoko-Shobo 2010 Assembled in Minami-Nagasaki